

厳寒期に耐える代用乳の給与方法と飼育環境について

1. はじめに

皆さんが日頃飼育している子牛にとって、これから更に厳しくなる寒さは大きな問題になります。夏場では普通に育っていた子牛も、気温が低下すると自分の体を維持するために、栄養分を消費します。冬場の子牛は、夏場と同じように飼育していたのでは、同じくらいの成長は見込めないことになります。ここでは当研究農場で行なっている冬場の代用乳給与や、管理方法の一部をご紹介します。

2. 具体的な管理方法の違い(表1)

①代用乳の給与量

当場では冬場(10~4月)は、夏場(5~9月)より代用乳を多く給与します。これは、厳寒期に子牛の体の維持のために消費する栄養分を少しでも補強するためです。

②代用乳の溶かす温度

冬場は、代用乳を溶かす温度をやや高めにします。これは代用乳を溶かし、子牛に給与するまでに、外気温により代用乳が冷めるためです。ここでの注意点は、夏、冬問わず、代用乳を給与する時の温度は、牛の体温(39~40℃)に近い温度とすることです。更に代用乳は60℃以上の高温で溶かすと、蛋白質の消化が悪くなることもあるため、お湯の温度の上限に気を配ることも大事です。

③離乳

当場では、冬場の離乳は、夏場より1週間程度遅らせています。離乳は、子牛にとって大きなストレスとなり、この時期での子牛のトラブルが多い現状にあります。そこで離乳を慎重に行なう目的から、代用乳を長く給与します。

④敷き料

当場の冬場の敷き料は、カーフハッチ、哺乳ロボット牛舎とも、冬場はおが屑の上に麦稈を施すようにしています。冬場は、地面や牛床からの寒気により、子牛の体が冷え、下痢などになりやすい傾向にありますが、当場ではそれを軽減する一助となっています。

表1 当場の飼育管理における夏季と冬季の違い

	項目	夏季(5~9月)	冬季(10~4月)
①	代用乳の給与量	4 L/日 (約500g)	5 L/日 (約600g)
②	代用乳を溶かすお湯の温度	約45℃	50~55℃
③	離乳	人工乳1kg採食時	1週間延長
④	敷き料	おが屑	おが屑+麦稈

3. おわりに

今回は、当場で行なっている冬場の管理例を挙げましたが、各農場の通常管理では実施出来ない内容もあるかと思います。今回挙げた方法は一例と考え、それぞれに合ったやり方で冬場を乗り切って頂きたいと思っています。

(北海道研究農場・飼料研究グループ 阿部)

雪印種苗株式会社

編集発行人 岡村 一範
本社004-8531札幌市厚別区上野幌1条5丁目1番8号

TEL (011)891-5911

FAX (011)891-5774